

1. 実施概要

(1) 日時：平成25年1月23日（水） 13:30～16:00

(2) 場所：ぎふ葵劇場（ドン・キホーテ柳ヶ瀬店8階）

(3) テーマ：「商店街（まち）のにぎわい創出に向けた取組
～中心商店街のあるべき姿・役割とは～」

(4) 進行

13:30～13:35 開会

・開会の挨拶 岐阜市長 細江 茂光

13:35～13:55 基調講演

・(1) ひとひとの会代表 佐藤 徳昭

・(2) 岐阜市中心市街地活性化協議会会長 岐阜大学名誉教授 合田 昭二

13:55～14:05 国からの施策紹介

・内閣府地域活性化推進室次長 田中 博敏

14:05～14:25 事例紹介

・岐阜市長 細江 茂光

・豊橋市長 佐原 光一

14:25～14:35 (休憩)

14:35～16:00 パネルディスカッション

・コーディネーター：合田 昭二

・パネリスト：豊橋市長、岐阜市長、

岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会理事長 市川 博一
佐藤 徳昭

16:00 閉会

2. 開催市長あいさつ

- 岐阜市は長い間にわたり、人間主義都市を目指そうということでまちづくりを進めてきている。都市、国の主役は人間。まちづくりや道路など、主役は人であるという認識でやっている。その中で岐阜市は人への投資ということで、教育、それを支える医療・健康への投資にもしっかりと取り組んでいる。
- 平成23年に初めて市の社会動態人口がプラスになった。子供医療費無料化などいろいろな角度でまちづくりに取り組んできたご評価などもあってのことだと思う。このシンポジウムは皆様にとっても我々にとっても有意義なものになることを心からご祈念してご挨拶とさせていただきます。



3. 基調講演

(1) 《人で人を呼ぶまちづくり活動 ～やなな引退の真実～》

- 柳ヶ瀬商店街非公式キャラクター「やなな」は2008年夏、あい愛ステーションのオープニングイベントで柳ヶ瀬ルンバとともに登場した。商店街は当時、いろんな意味で疲弊していた。アーケードが穴だらけだった。やななの頭の星は、じつはアーケードの穴を風刺したものだ。田舎で流行らせるには田舎以外の東京、渋谷などで流行らせないとダメだという考えでリリースを出したら、テレビ朝日や夕刊フジで取り上げられた。彦根のゆるキャラ祭りにも第一回から登場している。
- ユーチューブで毎週「やななが行く」という動画をアップした。Mixiやブログ、お散歩やイベントを行ったり、ユーストリームの番組も行ったりした。また、抽選でダンボール年賀状も送ったりもした。フジテレビの番組では、せんとくんの次に流行るのはやななと言っていた。制作費1万円でスタートしたが、朝日新聞では経済効果1億円を狙えるんじゃないかと書いていただいた。8月7日「やななの日」には、岐阜を楽しんでいただこうと鶺鴒観覧船で全国からお客様をお迎えした。インターネットのゆるキャラ・ランキングでは年間の1位になった。
- 交通費がかかっても柳ヶ瀬に人が来てくれることを証明しようという思いでやってきた。やななは、3月31日に引退イベントを行う。ファンになれば必ず人は来てくれる。それを証明できたと思う。絶頂のピークでやめ、その後きちんと余韻が残ってそれが伝説になっていくように頑張ってきた。引退後もコミックや写真集が全国発売になるし、大きなプロジェクトも動いている。やななは商店主の一人になろうとしているだけで、それを分かっていたらぜひ昔のような楽しくコミュニケーションのあふれる商店街になっていくのではないかと、それが究極の活性化ではないかと考えている。



(2) 《岐阜市「中心市街地」の変遷》

- 岐阜市の中心市街地は、位置や範囲という点で変遷してきた。中活政策の基本計画区域設定は平成11年以降4回行われている。1回目は平成10年の旧法によるもので、650haの広さだった。現在の区域は170haなので3.8倍にもなる。広いエリアとなった理由の1つ目は、市街地の連続性を重視したこと。中心市街地を多様なゾーンのネットワークと捉えた。2つ目は、重点産業が不鮮明で多様な産業の活性化を念頭に置いていたこと。3つ目は、エリアを絞り込むことへの反発に対する配慮があった。
- 2回目の区域設定は、現行法で平成19年に設定。約100haと絞り込まれた。他方で計画区域外との連携を重視し計画区域の隣接エリアとして「官公庁・公共施設ゾーン」を設け

た。理由は、岐阜大学医学部の移転後の利用計画が具体化したこと、また市民サービスのための公共施設配置を充実させる狙いがあった。3回目は、この隣接エリアを計画区域に加え、170haとなった。新しくこの拡大部分と岐阜駅前地区から柳ヶ瀬への「にぎわいの波及」という考え方を取り入れた。4回目は現在の計画で現行法の二期目で、同じエリアで170ha。柳ヶ瀬地区活性化の重点性を強く打ち出し、柳ヶ瀬に絞った数値目標を定めた。こういったプロセスをたどる中で、柳ヶ瀬の重点性がはっきりと浮かびあがってくる。

- 岐阜市の市街地の歴史を見ると、明治の終わり頃からは柳ヶ瀬が中心市街地の中核として存在してきた。それを追い越すような地区は形成されなかった。100年間変わっていない。その柳ヶ瀬も活性化進展がどうも遅い。そういう中で、柳ヶ瀬を押し上げていくエリアを登場させた。南からまちなか居住が進んできた岐阜駅前地区、北の方からは官公庁、公共施設ゾーン、とくに岐阜大学医学部跡地というわけだ。このような図式が鮮明になってきたのが、現在の岐阜市が置かれている状況である。



4. 国からの施策紹介

- これまで107市、118計画が認定されていたが、さらに3件認定され、現在は110市、112計画となっている。内閣官房では様々な施策を用意しており、中心市街地活性化以外では地域再生、都市再生、総合特区、さらには構造改革特区、環境未来都市などがある。この中で、大分県の豊後高田市では地域再生計画において、昭和のまちづくり計画を策定し、中心市街地のまち並みの古さを逆手に取った取組み例もある。
- 経済産業省の施策では、中心市街地魅力発掘創造支援事業費補助金が新規で10億創出されている。中心市街地商業等活性化支援業務等委託費事業の2億円もある。国交省の施策では、都市機能の集積促進として「暮らし・にぎわい再生事業」がある。北海道の滝川市において、高齢者向けの住宅整備によって病院改築等の民間投資を誘導するといった例がある。また「まち再生出資業務」の150億円、さらに「まちなか居住の推進」では、中心市街地の共同住宅供給事業、まちなか居住再生ファンドといったものがある。土地の整形・集約化として、土地再生区画整理事業、身の丈再開発の推進など。他に都市再生整備計画事業、民間まちづくり活動促進事業、都市環境維持・改善事業資金融資、住民参加型まちづくりファンド支援業務等がある。総務省については、中心市街地活性化ソフト事業、中心市街地再活性化特別対策事業の2つがある。



- 最後にシンポジウムの論点を深めるという観点から、抜本的な取り組みに向けたものを記載している。ご参考としていただければと思う。またとくに中心市街地を活性化する例として、空き店舗対策で長野県佐久市の例を挙げているのでご参考にしていただければと思う。

5. 事例紹介

(1) 岐阜市

- 岐阜駅周辺、柳ヶ瀬、岐阜大学医学部等跡地周辺、この3つの地域をイメージして取り組んでいる。市立図書館などを含む複合施設・岐阜メディアコスモスが今年着工になるが、現在の図書館は年間15万人弱ほどが来てくれているが、これが完成すると、少なめに見積もっても年間100万人が来てくれると思っている。人口推計が出ているが、岐阜市は東京23区などと比べても医療環境が充実しており、大きな人口減少があるとは断定できないと考えている。
- 大規模店舗の出店条件緩和もありドン・キホーテが進出してくれた。平成21年に名鉄メルサが閉店したその建物で、8階はこの葵劇場。ドン・キホーテは順調とのことで、レジを通過する人は年間100万人を超えていると聞いている。様々な取組みがあるが、富山の風の盆でここを流していただいたり、神田町六丁目で地域の人が野菜を売る広場をつくったり、柳ぶら楽市なども開催していただいている。青年会議所も方たちも頑張っていただいております、スイーツフェスタも5年間続いている。
- 岐阜駅前に最初に登場した岐阜シティ・タワー43は、上の部分が分譲マンションで、途中が賃貸マンション、下の方が商業、テレビ局も入っている。約20年間様々な議論があったプロジェクトで、まちなか居住を中心に組み替えたことによって即日完売という驚くべき成功だった。その北側には同様のスカイウィング37、西側にはホテルも新しくつくられた。柳ヶ瀬の中での居住ということで、八階建てのオアシス柳ヶ瀬は、高齢者向けのサービス付きの賃貸住宅だ。中部圏の駅力調査があり、101の駅のうち第二位にJR岐阜駅が位置付けられた。市民交通会議によって地域のコミュニティバスも幹線バスとともに走っている。国交省から国土交通大臣賞も受賞することになった。流入人口が増えたというのは大変嬉しいニュース、これからのソフト・ハード両面を整備し、魅力あるまちづくりに取り組んでいきたい。



(2) 豊橋市（愛知県）

- 中心市街地の商店街は駅前から始まる広小路商店街だが、その通りを使い、まちなかに魅力を取り戻し、経済を活性化しようということでいくつかの取組みを行っている。去年から始めたのが歩行者天国の復活で、なくなってから30数年経った後での復活だ。10月・11月の毎週日曜日の午後で開催。交通事故死者数が多い愛知県は大変規制が厳しいがなんとか名古屋市とともに実現できた。11万数千人集めることができ、まちなかに魅力と一定の空気があれば、時間を過ごしていただけることが確認できた。駐車料金の値下げとお帰りき

ぶは増えなかった。何が増えたかという、周辺のまちからJRに乗って出かけてくれる人が増えた。だが商店街の売り上げは伸びず、いちばん伸びたのは、駅ビルの商店街だった。新たな取組みでそうしたものを真のにぎわいに変えていきたい。

- 中心市街地の再開発事業も行っており、まちなか居住を中心とした空間確保、あわせてビルの再開発だ。毎年1棟から2棟のペースで進めている。最大のテーマで残っているものが今年から来年にかけてほぼ計画の方向が煮詰まると考えている。まちなかのいちばん拠点になる再開発だと考えている。
- 市民病院が郊外に移転し、跡地の利用が課題になっていた。前任の市長のときに、こどもの未来のための施設をつくろうとなって、こども未来館をつくった。類似の施設が全国にあるが、少ない成功事例の中にこの施設が入っている。一度きていただいて、どんなことをやっているか、誰が汗をかいているかをぜひ見ていただきたい。誰が汗をかいているかが、大事だと思う。またJR貨物がもっていた用地を利用して780席ほどの演劇を主体としたホールがオープンする。地元出身の俳優や劇団も多い。芸術を担う人材の育成も考えたものだ。ハードができたところがスタートラインだと思う。まちの人たちと一緒に企画をつくり、味わった感動をまちなかのにぎわいにつなげていきたい。



6. パネルディスカッションの概要

- (コーディネーター) 商店街の果たすべき役割、あるいは今後どこに力点を置くか、商業活性化に向けての抱負等についてご発言を、まずは豊橋市長からお願いしたい。
- (豊橋市長) 商店街は横に広がったモールだと思う。英語ではなく日本人の思うモールだ。イオンであったり、ダイヤモンドシティであったり、郊外に巨大なモール街ができつつあり、私たちもお客をとられて苦しんでいる。そういうものと張り合うのではなく、中心街ならではの一体感のあるモールになるのが、まちなかの商店街だと思っている。一つ一つの商店に足りないものを応援していきたい。

- (市川理事長) 柳ヶ瀬商店街ではたくさんの催しを行ってきた。資料があるのでご覧いただければ有難い。去年の7月1日で、柳ヶ瀬ができてから123年ということもあり、2010年に新しい理事会ができてあしかけ3年、ホップ



- ステップジャンプという形でなんとかベクトルを変えよう、結果を出そうと柳ヶ瀬123計画を立てやってきた。商店街は貨幣換算できない無形の資本としてのコミュニティの場でもあるし、公共財でもあると思う。市長はまちなか居住支援を進めて見えるが、ぜひその商店版として、新規出店や郊外で孤立している商店をまだ生きている商店街 中心市街地柳ヶ瀬エリアに集結させるような施策をお願いできれば有難い。また集中投資もしていただきたい。初期投資補助に軸足をうつしていただければと思う。
- (佐藤代表) 地元のコミュニティをどうするか、また地元以外のお客様をどう呼ぶかという2点に取り組んでいるが、地元ではまず商店街のマップをつくっている。デジタルなことをやるよりアナログな地図をつくってそこに魅力をのせようと。ファンづくりをやっているのので、店主を毎回1人や2人のせてコミュニケーションがとれるようにしようとした。毎回、人を紹介するためにマップをつくっている。いろんな販売促進もできるので有効だ。地元以外では、電車で行けるところに200万人の名古屋があるという逆の発想で、アプローチさえできれば人を引っ張ってこられると考える。そこで使わなければいけないのは名古屋のメディアだ。やなながいなくても仕掛けができると確信している。
- (岐阜市長) 柳ヶ瀬などの地方都市の中心市街地が大変厳しいのは、必ずしも商店街だけの問題ではない。日本が少子高齢化してきたことで購買力が落ちているのが根っこの問題だと思う。もうひとつは、バーチャルなネット通販とか電子図書など時代背景が変わってきている。最も大切なのは、集まることの本来の楽しさ、群れるということがいかに楽しいかをアピールできる商店街にしていかなければならないということだ。ハードというよりソフトの素晴らしい商店街をつくっていけば、必ず人は集まってくると確信している。また柳ヶ瀬の中に住む人がいないという状況を解消する必要があり、多世代が一緒に生活できる居住も目指していきたい。
- (コーディネーター) 豊橋市長は、コンパクトシティを重視しているとのことだが。
- (豊橋市長) もちろんいろいろなコストの面でコンパクトにしたいのはあるが、それ以外にも、鉄道網がまちの骨格として残っていること、またまちなかに商店街や市の公共施設などが残されていることなどがある。郊外にでていったものを再整備するなかで、まちなか居住に結び付けていきたいと思う。その中心として商店街がしっかり生き残って役割を果たしていただける、そんな空間づくりをしていければと思う。

- (コーディネーター) 商店主の考え方の中に、今後活性化への希望が持てるような側面など、お気づきの点があれば。
- (市川理事長) やななとともにさくさんイベントをやってきたが、いちばん大事なのは柳ヶ瀬の中の人間のやる気だ。売上の低迷により心の余裕もなくして、ある種、商店主としてのモラルの低下も招いている。これは地域内だけでなく、まわりの商店街にも連携を求めて、柳ヶ瀬集会という形のものを開きたいと考えている。直接声を吸い上げるということをまず突破口にしたいと考えている。
- (コーディネーター) 佐藤代表にやなな以外のことも含めて、印象的な例をひとつ挙げていただきたい。
- (佐藤代表) 先ほどお話した、アイマップは地味に15回続けているが、全国の商店街でこれだけ支援を受けずに続けているマップはなかなかないようだ。年に2回発行しているが、みなさんに愛されるものになってきている。やななもこれとともに育てていただいたし、販売促進もやりやすくなって環境づくりができた。
- (コーディネーター) 細井市長はまちなか居住の重要性を強調されたが、その点さらにおっしゃりたいことがあれば伺いたい。
- (岐阜市長) まちなか居住はそれ自身、購買力になるが、かつて商店街に求めたのは非日常的なものであろうと。何か普通の生活では感じられない、きれいな建物やきれいな着物があるとか。これからの高齢化時代に求められるまちの雰囲気は、人間のにおいのするまちでなければいけないだろうと思う。もうひとつは、これからは非日常的なものから人間的なもの、人の情であるとか、そういうものを情報発信することも重要だと考える。また健康というのも重要なテーマではないかと思う。
- (コーディネーター) 4人の方々のご発言を聞き、中心市街地の役割も再認識できたし、多面的な努力が必要であること、それがいろんな場面において行われていることも認識できた。それを踏まえて我々もさらに努力を進めていかなければならないと決意を新たに次第だ。

7. 閉会